

橋梁技術者の 育成に関する研究会 報告書

Japan Steel Bridge Engineering Association

TECHNICAL REPORT /No.064

平成19年4月



鋼橋技術研究会



まえがき

活力ある社会の持続のためには、社会基盤整備の重要性は変わらず、その中で人の移動と物流を支える鉄道・道路網およびその主要部分となる橋梁に対する高い技術への要求がなくなることはありえない。したがって、特に今日のような、建設業界に対する否定的な意見が社会に蔓延しているような時代には、この分野の将来の担い手である橋梁技術者をどのように育成するかについて検討することは重要である。

このような観点から、鋼橋技術研究会ではこれまでなかった範疇の人材育成に関する本部会を2002年に発足させた。本部会は、20～30代の若い技術者から40～70代の中堅および円熟した技術者、すなわち、教育される立場の技術者と教育する立場の技術者で構成されている。橋梁技術者の育成という同じ課題であっても、部会員それぞれの根底にある思い、したがって課題克服の目的、考えている対象等はかなりの広がりがあるなかで、まずは、育成する人材の資質、育成するためのプログラムとツール、社会並びに若手技術者自身への啓蒙と自信確保を目指した3つのWGを設置して活動を開始した。

橋梁技術者といっても、どのレベルの技術者を対象とするのか、どの職種を対象とするのか等で、簡単には一括りにできないが、本部会の検討では、少し大きめに枠を広げることとした。公共事業が停滞気味の風潮の中で、鋼橋業界・橋梁業界を復権させる魅力ある人材を集めるにはどうしたらよいかを考え、産・官・学の立場での人材育成プログラムが必要との立場から設置された部会であるが、本報告はその第一段階の成果をまとめたものと理解していただければ幸いである。

因みに、2006年1月発行のJABEE NEWS第2号に、日本経済団体連合会産学官連携推進部会長で次期のJABEE産業界担当副会長である山野井昭雄氏が、「産業界から見たJABEEへの期待」と題した小論の中で、「若手技術系人材に対する経団連企業の厳しい目」として、以下のような指摘をされている。専門的知識については特段問題視するコメントは無いが、数学、物理、化学、生物、語学などの基礎学力不足に対する指摘が一番多い。次いで、問題発見力、発見した問題をテーマとして論理的に設定する能力の不足と、それに関連しての指示待ち体質の指摘が多いとも付け加えられている。もっとも、問題が与えられればそれを解いてレポートにまとめる力についての不満は出ていない。しかし、企業に入って何をしようとするのか、目的意識の欠如と、意欲の低下傾向は挙げられている。また、工学的基礎というべき製図や配線図を読む力が不足しているものも

少なからずいる。これらについては実は若手技術者自身が良く認識しており、その原因を大学および大学院時代の勉強の仕方に求めるコメントが出されている。さらに、インターンシップで国内の大学院生と一緒に海外の大学院生を受け入れている複数の推進部会構成企業から、以上の若手の問題点を裏返した指摘、すなわち、問題発見力や課題設定力について、海外からの若手は優れており、我が国の若手と明確なギャップがあるとのコメントも出されている。

山野井氏は、目的意識をもって勉強するには、インターンシップの改革、産学官の人材交流、先端技術の産学協力の場作り、企業がJABEE設定プログラム修了生の能力をアウトカムズ思考で評価すること、など企業の協力が必要であると述べている。

これらの指摘は、橋梁技術者を取りまく環境にも概ね当てはまっており、本部会でも同様な議論がなされているが、なかなか大きな問題であり、具体的な解決策は今後も継続して検討する中から生み出されればと思っている。

当初はもう少し早い段階で第一段階の成果をまとめるべく活動を行っていたが、鋼橋技術研究会 20 周年記念行事と、橋梁業界を直撃した社会的問題とに、各社各部会員が対応を余儀なくされ、最後のまとめに思いの外時間がかかってしまった。偏に部会長の計画性の足りなさによるものである。

最後に、熱心な活動を行っていただいた、倉西茂顧問をはじめとする部会員の皆様に深く感謝するとともに、本報告が時代を担う橋梁技術者の育成にいささかでも役立つことを祈念して皆様のご批判を期待したい。